少菌型ハンセン病の1例

田村暢子¹⁾、²⁾ *、山本美穂¹⁾、西澤春彦¹⁾、猪又直子¹⁾、高橋さなみ¹⁾、
北村 創¹⁾、長谷哲男¹⁾、倉菌普子³⁾、原 正道³⁾、杉田泰之⁴⁾、三木信男⁵⁾

1) 横浜市立大学医学部附属市民総合医療センター皮膚科

2) 横須賀北部共済病院皮膚科

3) 横浜市立大学附属市民総合医療センター病理部

4) 横浜市立大学医学部附属病院皮膚科

5) 三木クリニック

〔受付：2003年8月1日〕

キーワード：ハンセン病、少菌型、フィリピン

症 例：31歳、女性。フィリピン出身、数年前から日本に在住。

主 訴：顔面、頸部の皮疹。

初 診：平成12年9月4日。

既往歴：特記すべき事なし。

家族歴：ハンセン病を思わせる症状を呈する者なし。

現病歴：初診の約1年前の平成11年7月頃から左大腿部、臀部右側に、平成12年4月頃からは頸部に自覚症状の無い紅色局面が出現した。初診の約2カ月前の平成12年7月頃からは顔面にも紅色局面が出現したため某医皮膚科受診し、外用薬を処方された。著変ないため、同月に某内科医院受診し、マレイン酸クロロフェニラミン等を処方された。これらの内服にても著変ないため前医皮膚科再診し、当科に紹介され受診した。

現 症：おとがい部に境界明瞭で軽度隆起し、表面に光沢を帯びた紅色局面を認めた。頸部右側に境界明瞭な鱗屑を伴う紅色局面を認めた（図1 a）。臀部右側に3 cm大の紅色局面を、左大腿部

に10 cm大の境界明瞭で周辺部に紅色調の強い扁平隆起性局面を認めた（図1 b）。計4個の皮疹部全てにおいて触覚と痛覚の低下が認められた。右の尺骨神経に数珠状の肥厚を認めた。

病理組織学的所見：表皮に著変無く、真皮直下から真皮全層にわたり神経、血管および付属器周囲に密な炎症細胞浸潤を島嶼状にみとめた（図2 a）。炎症細胞は多数のリンパ球と類上皮細胞、巨細胞からなり、いわゆる類結核性肉芽腫の像を呈していた（図2 b）。乾酪壊死は認めなかった。神経周囲には多数のリンパ球と類上皮細胞が浸潤していた。病理標本のZiehl-Neelsen染色では抗酸性桿菌は認めなかった。

臨床検査成績：末梢血、生化学的には、異常所見はみられなかった。皮膚組織標本からDNAを抽出しpolymerase chain reaction (PCR)法をおこなったところ157bpのらい菌特異的DNAが検出された。

以上よりハンセン病と診断した。世界保健機構（WHO）の分類ではpaucibacillary PB（少菌型）、Ridley-Joplingの免疫学的分類ではBorder-line Tuberculoid type BTと診断した。

治療および経過：オフロキサシン(OFLX)600mg/日で治療を開始したが、患者の以前からの予定ど

*Corresponding author :

横須賀北部共済病院皮膚科

〒237-0076 横須賀市船越町1-8

Tel:046-861-3161 Fax:046-861-3167

うりに、翌週にフィリピンに帰国し、当地で治療を続けることとなった。

考 按：日本におけるハンセン病新患者数は近年減少しており、特に日本人では年間10人以下となっている¹⁾。しかし、在日外国人の新患者は最近増加している。1996年4月のらい予防法廃止に伴い、一般医療機関においてハンセン病患者を診断、治療する機会が増えている²⁾。発展途上国から入国する外国人が増加している現在、ハンセン病は頭に置いておかなければいけない疾患の1つ

であり、神経障害による後遺症を残さないためにも皮膚科医の役割は重要だと考えた。

文 献

- 1) 石井則久、杉田泰之、中嶋 弘：ハンセン病新患動向-1993年から1997年まで。日皮会誌 109；763-767, 1999.
- 2) 石井則久：これからのハンセン病。日皮会誌 107；943-948, 1997.

図1a 頸部右側の境界明瞭な鱗屑を伴う紅色局面。

図1b 左大腿部の境界明瞭で周辺部に紅色調の強い扁平隆起性局面。

図2a 病理組織HE標本弱拡大像。真皮直下から真皮全層にわたり神経、血管および付属器周囲に密な炎症細胞浸潤を島嶼状に認める。

図2b 病理組織HE標本強拡大像。多数のリンパ球と類上皮細胞、巨細胞が浸潤し、類結核性肉芽腫を形成。

A Case of Paucibacillary Leprosy

Nobuko Tamura ^{1), 2) *}, Miho Yamamoto¹⁾, Haruhiko Nishizawa ¹⁾,
Naoko Inomata ¹⁾, Sanami Takahashi ¹⁾, Hajime Kitamura ¹⁾,
Testuo Nagatani ¹⁾, Yasuko Kurasono ³⁾, Masamichi Hara ³⁾,
Yasunori Sugita ⁴⁾, Nobuo Miki ⁵⁾

1) Department of Dermatology, Yokohama City University Medical Center

2) Division of Dermatology, Yokosuka Hokubu Kyosai Hospital

3) Department of Pathology, Yokohama City University Medical Center

4) Department of Dermatology, Yokohama City University School of Medicine

5) Miki clinic

[Received: 1 August 2003]

Key Words : leprosy, paucibacillary, philippine

We report a case of leprosy. A 31-old-filippine female present with 5 month history of an erythematous plaque on her right neck. Examination showed 4 erythematous plaques with her. A histological examination of the skin lesion of her thigh revealed granulomas around nerve and skin appendages which consist of lymphocytes, epidermoid cells and giant cells. Although no acid fast bacilli were not demonstrated by skin biopsy with Ziehl-Neelsen staining, the *Mycobacterium leprae*-specific DNA was detected by polymerase chain reaction method. A diagnosis of paucibacillary leprosy had made. We started treatment with ofloxacin but she return to filippine soon.

*Corresponding author :
Yokosuka Hokubu Kyosai Hospital
1-8 Funakoshi-cho, Yokosuka-shi, Japan
Tel:046-861-3161,Fax:046-861-3167